



甲虫ニュース



COLEOPTERISTS' NEWS

No. 33

(Mar. 1976)

日本産タマムシ科概説 (16)

黒 沢 良 彦

39. Genus *Pachyscelus* SOLIER, 1833 ヒラ  
タケシタマムシ属

体は扁平で短太，肩部から翅端にかけて一様に狭まる。小楯板は大きく，横に広い三角形。背面は光沢が強く，毛斑のあるものもあるが，アジアの種類はすべて無紋。新大陸に広く分布し，約280種を含むが，その一部はアフリカからインドを経てマレー半島やインドシナ半島，中国南部，台湾などにも拡がり，アジアからは約20種が知られている。日本には全く産しないが，台湾に1種，中国南部に3種，インドシナ半島に4種知られている。しかし，日本からは将来も望めないであろう。

40. Genus *Galbella* WEST-  
WOOD, 1848 メカクシケシタマムシ  
属

前属に似ているが，背面の隆起が強い。頭部は小さく，複眼の大部分が背面から見ると前胸背の下に隠れ認められない。小楯板は小さく，縦の三角形であるなどの点で区別される。アフリカからインドを経てインドシナ半島に至る地域に50余種を産する。インドシナ半島からは4種が知られ，その中の1種が海南島にまで分布する。恐らく中国南部にも産すると思うが，台湾や日本からは期待出来ないであろう。

C. *Trachydini* チビタマムシ族  
脛節は自由で，前族の様に腿節の下方にある溝の中に受け入れられるようなことはない。従来はチビタマムシ亜科のうち，短太な体をしたものを本族に，細長なものを前族に属させていたが，それは既に述べた通り不合理で，両者を分ける絶対的な特徴は見当たらない。ここでは一応，肢の構造で両者を区別したが，チビタマムシ亜科を族に分けるにはホソツツタマムシ族とチビタマムシ族の二つに分けるだけで

よく，ケンタマムシ族は後者に含めた方がよいかも知れない。全世界に広く分布し，多くの種類があるが，属の数は比較的少なく，東亜では2属だけで，他の大部分は新大陸産である。東亜産2属は次の点で区別される。

1. 翅鞘には肩部から翅端に至る明瞭な縦隆脈を走らせる *Habroloma* C.G. THOMSON, 1864
- 翅鞘には縦隆脈を欠くか，または肩部に短い小隆脈がある…*Trachys* FABRICIUS, 1801

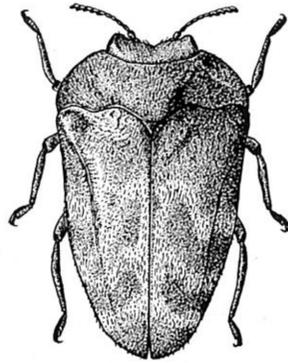
41. Genus *Habroloma* C. G. THOMSON, 1864  
ヒラタチビタマムシ属

ヨーロッパ産の *Trachys nana* (PAYKULL, 1799) を模式種としているが，ヨーロッパにはむしろ少なく，熱帯アジアから東亜にかけて種類が多い。一部はオーストラリアやアフリカにも拡がっているが，新大陸には全く産しない。

日本には10余種を産するが，大部分は熱帯アジア系のもので，ユーラシア大陸系のものは1種だけである。チェコスロバキアの故 J. OBENBERGER は最後まで本属をチビタマムシ属 *Trachys* FABRICIUS, 1801 の亜属と見做し，独立属とは認めず，独立属と認めるフランスの A. THÉRY と対立して来たが，最近では独立属とするフランス派の方に軍配が挙がった形になって

亜属とする人はない。私も後者に従っているが，日本産の大部分の種類はヨーロッパやアジア大陸の中北部にいる真の *Habroloma* とはかなり異った形態をしているので，1959年に亜属 *Parahabroloma* を設け，真の *Habroloma* から区別した。東アジアから東南アジアにかけての種類的大部分はこの亜属に属するものであろう。両者は次の点で区別される。

1. 体は膨隆しチビタマムシ型，短太，両複眼



第16図 ヒラタチビタマムシ  
*Habroloma elegantula*  
SAUNDERS (北隆館，日本  
昆虫図鑑，1950)

間は割れが弱く、複眼の内縁は縁取られることはない；前胸背は膨隆し、前縁角の内側方に大きく明瞭な孔状陥凹がある… a. *Habroloma* s. str.

- 一 体はむしろ扁平、両複眼間は深く割られ、複眼の内縁は鋭く隆脈状に縁取られる；前胸背は側方で扁平、前縁角の内側は多少広く浅く陥凹し、時にその中央に小孔がある……

…b. *Parahabroloma* Y. KUROSAWA, 1959

a. Subgenus *Habroloma* s. str. スジチビタマムシ亜属

1. *H. (H.) amurensis* OBENBERGER, 1922 スジチビタマムシ 分布：日本(本州)，朝鮮，シベリア東部(沿海州)。体長 2.5mm 内外，唐金色，暗色を帯びたり真鍮色を帯びたりする。翅鞘の前半部に銀白色の毛斑があるがはっきりしない。一見クロチビタマムシ *Trachys pseudoscrobiculata* OBENBERGER に似ているが，翅鞘に隆脈があるので *Habroloma* 属であることがわかる。ウラジオストックから記載された種類であるが，私は長野県軽井沢産の 1 ♀ (7~14. vii. 1959, 森本 桂氏採集)，韓国慶尚南道修道山産の 1 ♂ (17~18. vii. 1971, K. YAMAGISHI 採集) を検した。いずれも新記録である。日本産は大型で暗色であるが，極めて稀ならしく上記の 1 ♀ しか検してないので，亜種を決定するに至ってない。一応上記の種として記録しておく。なお *amurensis* OBENBERGER, 1922 の原記載 (Časopis Čs. Spol. Ent., 19, p. 69) にある図はどう見ても次の *Parahabroloma* 亜属に属する種類のように見えるので，プラーグの国立博物館にある模式標本を見るまでは，上記の軽井沢産の標本を本種と同定することは出来ずにいたものである。加害植物は全く未知であるが，ヨーロッパの近似種 *H. nana* (PAYKULL) や *H. triangularis* (LACORDAIRE, 1835) の食草がフクロソウ科(Geraniaceae)のフクロソウ属 *Geranium* やオランダフクロソウ属 *Erodium* であるから，本種の食草も多分この仲間であろうと推定される。さし当り，ゲンノショウコ *Geranium nepalense* SWEET やタチフクロ *G. japonicum* FRANCH, et SAV. などは最も有力な候補であるが，本種の分布が本州中部などの高原地方に限られるならば，他の同属の草も調べる必要がある。

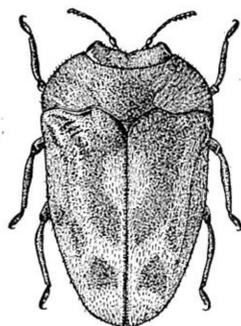
b. Subgenus *Parahabroloma* Y. KUROSAWA, 1959 ヒラタチビタマムシ亜属

体が一般に扁平で，前胸背が扁平されて前側方に膨出しているので，チビタマムシ属 *Trachys* に似た形をした前亜属の種類とはすぐ区別出来る。前亜属の種類が中央アジアの乾燥した草原を中心にヨーロッパやシベリアに広がった草本の潜葉虫であるのに反し，この *Parahabroloma* 亜属の種類はインドシナ半島あたりに分布の中心があり，東南アジアやインドに多くの種類がある。前亜属とは異って，キ

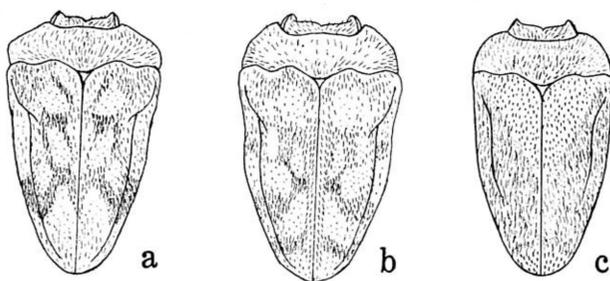
イチゴ類や木本類の潜葉虫で，完全な草本に加害する種類は知られていない。日本へは中国の中南部から直接侵入したものと考えられ，一部分は朝鮮にも産するが，北海道には 1 種も産しない。東北地方でも 1~2 種しか産しないのに九州には 7 種も産する。大陸でも北ほど種数少なく，北朝鮮，満洲，シベリアなどには 1 種も見当たらない。日本には次の 12 種を産する。

1. *H. (P.) asahinai* Y. KUROSAWA, 1959 オキナワヒラタチビタマムシ 分布：琉球(沖縄本島)。体長 3.0mm 内外，暗唐金色，黄金色と銀白色の 2 色の毛で美しい毛斑があるが，前者の多いものや後者の多いものなど変化が多い。前胸背は幅が広く，側縁は中央よりやや後方から前縁に向けて急激に狭まる。屋久島や種子島に多いシロビヒラタチビタマムシ *H. (P.) kagosimana* OBENBERGER に近い種類であるが，前胸背側縁の狭まり方が著しく強く，直線的である点で区別出来る。沖縄における後者の代替種と考えられるが，沖縄本島以外からは知られていない。加害植物はホウロクイチゴである。(第 18 図 a)

2. *H. (P.) elegantula* (E. SAUNDERS, 1873) ヒラタチビタマムシ 分布：日本(本州，四国，九州，対馬)，朝鮮，中国。体長 2.8mm 内外，G. LEWIS の第 1 回の採集品に基いて記載された種で産地は単に Japan となっているだけであるが，恐らくは長崎か神戸周辺のどちらかであろう。小型で暗唐金色，黄色と銀白色の毛斑があるが，個体変化が多く一様ではない。前胸背の前縁角内方の陥凹中に明らかな小孔があり，これがない前種のグループの種類と区別される。青森県以南の各地に普通な種類で，主としてナワシロイチゴなど草本性のキイチゴ属の植物につくが，モミジイチゴ，クマイチゴなど半木本性のキイチゴ類でも時々見かける。プラーグのチェコスロバキア国立博物館にある *H. ronino* OBENBERGER, 1916 の模式標本を調べたら，まぎれもなく本種であった。J. OBENBERGER が *elegantula* E. SAUNDERS と思っていた標本は皆 *H. griseonigra* E. SAUNDERS, 1873 であったので，彼は真の *elegantula* に新たに *ronino* と命名したのであろう。私が，OBENBERGER の記載ばかりに拘って *ronino* とした種類は，しかし，*elegantula* とは明らかに異なる別種であるが，明確な種名は決っていない。恐らく新名を与えなければならぬ種類であろう。*ronino* と云う種名の意味は私には判らない。中国浙江省鎮江から記載された *H. formaneki* OBENBERGER, 1930 や同じく浙江省蘇州から記載された *H. suenisoni* GEBHARDT, 1928 も共に本種と同一であろう。後者はパリの国立自然科学博物館とプラーグの国立博物館の両方に Type とラベルのついた標本があるが，共に新鮮で毛斑の鮮明な個体である。しかし，原記載には産地を China: Soochow (蘇州) と明記してあるのに両博物館の“type”標本は共に China, Hangchow (杭州) と云うラベルが付いていて原記載とは異なっている。一方，*H. atronitida* GEBHARDT, 1928



第17図 ハイイロヒラタチビタ  
マムシ  
*Habroloma griseonigra*  
— SAUNDERS (北隆館, 日本  
昆虫図鑑, 1950)



第18図 a. *Habroloma asahinai* Y. KUROSAWA オキナワヒラタ  
チビタマムシ b. *H. kagosimana* OBENBERGER シロズ  
ヒラタチビタマムシ c. *H. eximia* LEWIS ツマキヒラタ  
チビタマムシ

は、パリ国立自然科学博物館のものは、本種の古くなって毛斑が剥脱して黒くなったものであるが、ブラーグ国立博物館のものは、私が1959年に *H. kagosimana* OBENBERGER としたものであった。恐らく、本種は大陸では揚子江沿岸地域に広く分布するものであろう。また、朝鮮半島南部にも産する。(第16図)

3. *H. (P.) eximia* (LEWIS, 1892) ツマキヒラタチビタマムシ 分布：日本(四国, 九州, 屋久島?), 琉球(八重山), 中国, 海南島, 台湾。体長3.0mm内外, 唐金色, 小楯板を囲む三角形の大紋と翅端部は赤銅色, 同色の毛を密生する。G. LEWIS の2回目の旅行の際の採集品で, 原記載には “Kiushiu. Ten examples taken in the Higo forests” とある。Higo forests がどこか判らないが, 恐らくは大矢山国有林か湯山であろう。加害植物はハイノキ科のシロバイであることが白水 隆教授によって確められた。恐らく近似の植物にもつくであろう。四国では高知県, 九州では熊本県の他に福岡県, 鹿児島県などが知られている。屋久島では1952年7月に尾の間でシロバイの葉にチビタマムシ類特有の食痕を発見したが, 成虫の記録はまだ見当らない。奄美群島と沖縄群島のものはかなり著しい差異があるので別種としてよいであろう。八重山諸島産は奄美や沖縄のものより明らかに大きく, 台湾のものに近く, 同一亜種と見做して差支えないであろう。この場合, 亜種名には台湾恒春産の標本に基づいて独立種として記載された *H. eupoeta* OBENBERGER, 1929 が亜種名として用いられる。中国大陸産は日本産に比べ翅端の銅色部が広く, 翅端外縁近くの小鋸歯状が強いので, 別亜種としてもよいと思うが, これに当る記載が見当らない。私は広東省産と海南島産を検した。(第18図C)

4. *H. (P.) griseonigra* (E. SAUNDERS, 1873) ハイイロヒラタチビタマムシ 分布：日本(本州, 四国, 九州), 中国, 台湾。体長2.8mm内外, 暗唐金色または黒色, 銀白毛からなる特異な斑紋があり,

まぎらわしい種類はない。時にわずかな黄金色毛を混ざることがある。他種に比べて頭楯の幅が広いので毛斑が脱落しても注意すれば見別けられる。幼虫はタヌギ, アベマキ, カン類などの潜葉虫で, 関東地方から西の各地で見られるが多い種類ではない。G. LEWIS の第1回の旅行の採集品で, 基標本の産地は長崎である。台湾産は大型で毛斑が多少異り, 独立種として記載された *H. chionochoeta* OBENBERGER, 1929 がこれに当るが, 独立種とする必要はないであろう。模式標本の産地は埔里社, 1929年8月三輪勇四郎博士の採集品である。私の手許には阿里山奮起湖産の1頭(12. iv. 1965, 三枝豊平博士採集)がある。中国からは未記録であるが, 私は福建省と江西省産各1頭を検した。日本産とほとんど差異が見当らない。(第17図)

5. *H. (P.) hikosanensis* Y. KUROSAWA, 1959 ヒコサンヒラタチビタマムシ 分布：日本(九州)。体長3.1mm, 明かるい真鍮色, 黄色を帯び灰白色の毛斑がある。私がロニノヒラタチビタマムシとしていた種類に似ているが, 背面から見ると顔面が広く深く剝られ, 複眼がほぼ直角に突出する点で区別出来る。前胸背の前縁角内方の陥凹中には小孔がある。ヒラタチビタマムシ *elegantula* にも一見似ているが, 後方に長く, 前胸腹板突起は先端に向かって拡がる点で異なる。稀な種類なようで, 土生昶申博士が福岡県英彦山で採集された1頭以外に本種に当る標本を見たことがない。

6. *H. (P.) kagosimana* OBENBERGER, 1940 シロズヒラタチビタマムシ 分布：日本(四国, 九州, 屋久島, 種子島)。体長3.1mm内外, 唐金色を帯びた黒色の地に黄褐色と銀白色の毛斑がある。体は幅広く後方への狭まりは *asahinai* や *elegantula* に比べて弱い。前胸背の前縁角内側の陥凹中の小孔はない。種子島, 屋久島, 九州佐多岬などではホウロクイチゴに普通な種類で, 四国の高知県や九州の宮崎県, 鹿児島県, 長崎県などの標本も検した。また長崎県佐世保の標本は白水 隆教授によってフユイ

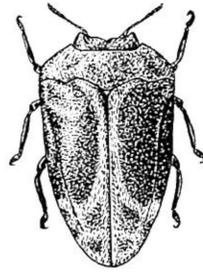
チゴから採集された。

私は1959年に屋久島や種子島の標本に基いて本種を新種と認め *H. shirozui* Y. KUROSAWA を記載した。一方、原記載だけに基いて *H. kagosimana* OEBENBERGER, 1940 を *H. elegantula* E. SAUNDERS によく似ていてより小型で円味の強い種類に当て、おまけに *kagosimana* を勝手に *kagoshimana* とする大間違いをしてしまった。この間違いは、*kagosimana* の原記載が不完全で *elegantula* と区別出来ない上に体長を  $2\frac{1}{2}$ mm と実際より小さく記してあったからである。本種は *elegantula* よりも明らかに大型で最小のものでも、2.9mm、大きなものは3.3mmに達するので、2.5~2.8mmの上記の種に当ててしまったわけであるが、実際にプラーグの国立博物館にある模式標本を見てみると、体長は3.0mmもあり、前胸背の小孔もなく、黄色毛は多いけれども明らかに私が *shirozui* と命名した種類であった。従って、残念ではあるが *shirozui* を *kagosimana* のシノニムと認めざるを得ない。(第18図b)

7. *H. (P.) liukiuiensis* OEBENBERGER, 1940 オキナワヒラタチビタマムシ 分布：琉球(奄美群島、沖縄群島)。体長2.8mm内外、ツマキヒラタチビタマムシ *H. eximia* LEWIS に似ているが、小型で細形、体色は明るく、一様に真鍮色で時に緑または銅色を帯び、翅鞘基部の三角紋と翅端の銅色部は全く消失するかわずかに翅端部だけに現れる。毛は一様に黄灰色、わずかに不明瞭な銀白毛を混ざる。独立種として記載されたものであるが、私は1959年に *eximia* の亜種にした。しかし、奄美群島と沖縄群島のものは上記の特徴により他地域の *eximia* から判然と区別出来るので、やはり独立種とした方がよいであろう。奄美大島では比較的普通にいるが、沖縄本島では少なく、私は伊豆味でリュウキュウハイノキから数頭を得た。模式標本の産地は Ku-Kien-San, Liu-kiu Isl. であるが、Ku-Kien-San がどこにあるのか私には判らない。プラーグの国立博物館の模式標本は古ぼけた個体で、かなり大きく、沖縄や奄美産のものにこの学名を当てるのは考えものであるが、一応この種名を当てることにした。

8. *H. (P.) lewisii* (E. SAUNDERS, 1873) ルイスヒラタチビタマムシ 分布：日本(本州、四国、九州)、朝鮮、中国。体長2.5~3.2mm、頭胸部は堇色を帯びた唐金色、翅鞘は美しい青藍色、会合部と翅端部は黒紫色、部分的に唐金色を帯びる。赤褐色毛と白毛で特異な斑紋がある。模式標本は G. LEWIS の第1回旅行の採集品であるから多分神戸か長崎のどちらかの地方産であるが、原記載でも模式標本のラベルも共に Japan だけである。主として西日本に分布し、少ない種類ではないが、中部地方以北では少なく、私の見た最北の産地は長野県軽井沢(1♀, 22. vii. 1951, 久松成氏採集)である。関東地方からはまだ記録がない。幼虫はノイバラの潜葉虫で、関西から西の地方では稀ではないが、私はまだ

紀州から九州南部に至る太平洋岸の地方の記録を知らない。朝鮮では中南部の黄海斜面に産し、中国では揚子江沿岸の地方から福建省や広東省にかけての地域に多い。大陸のものは翅端の白横帯が日本産のものより翅端近くに位置する傾向がある。また、福建省から広東省にかけての地域のものには毛が長く濃色になり、全体に青味が拡がり色が鮮かになる。プラーグの国立博物館にある J. OEBENBERGER のコレクションではこの様なものに *selsula* OEBENBERGER と云う亜種名が付けてあったが、この名はまだ発表されていない。(第19図)



第19図 ルイスヒラタチビタマムシ *Habroloma lewisii* E. SAUNDERS (黒沢, 1950)

9. *H. (P.) nixilla* OEBENBERGER, 1929 カラカネヒラタチビタマムシ 分布：琉球(奄美大島)、台湾。体長2.9~3.5mm、大型の種類で、ナミガタチビタマムシ *Trachys griseofasciata* E. SAUNDERS を平たくした様な形をし、色彩も似ている。唐金色で多少チョコレート色を帯び、黄金色と銀白色の毛斑があり、暗色部には地色と同じチョコレート色の毛がある。模式標本は台湾の Shinsha(新社?)で1928年6月に三輪勇四郎博士採集の♀であるが、台湾では各地に多いものらしく、私も南山溪でサルスベリの1種から採集した。*H. sinna* OEBENBERGER, 1937 も全く同じ種類で、模式標本は Taikokan で1925年5月に三輪博士採集の♀である。奄美大島では1955年7月に白水 隆教授が初めて発見したもので、シマサルスベリにつくことを同教授は確められた。同島のものは台湾のものに較べて毛斑が鮮明、複眼がより突出し、前胸腹板突起がより狭いなどの点で異なり、亜種 *insulicola* Y. KUROSAWA, 1959 と云う。琉球列島内の産地は目下の所、奄美大島だけに限られ、他の島からは発見されてない。

10. *H. (P.)* sp. ナガヒラタチビタマムシ 分布：日本(本州、四国、九州)。体長3.0mm内外、ヒラタチビタマムシ *H. elegantula* E. SAUNDERS によく似ているが、多少大形で後方に長く伸びるような形をしていて、色彩も明るいものが多い。前胸腹板突起は先方で多少拡がる。この点でヒコサンヒラタチビタマムシ *H. hikosanensis* Y. KUROSAWA に最も近いが、複眼の突出状態が異なる。前胸背の前縁角内方の陥凹内の小孔は明瞭。東北地方南部から四国、九州にかけての暖地に分布するが、多い種類ではない。加害植物は矢野俊郎氏によってクルミ科のノグルミであることが確められたが、他にも加害植物があるような気がする。前述の通り、その原記載だけによって、私は1959年に本種の種名に *H. ronino* OEBENBERGER, 1916 を用いたが、これは誤りで、*ronino* は *elegantula* ヒラタチビタマムシ

シのシノニムであることが判明した。従って、従来  
の和名ロニノヒラタチビタマムシも本種の和名に用  
いるのは不相当であるので上記の和名に改称した。  
学名は目下の所、これに当るものを見出し得ないの  
で、一応 sp. にしておいたが、新名を与えなけれ  
ばならないものであろう。

11. *H. (P.)* sp. ヒメヒラタチビタマムシ 分布：  
日本（四国，九州），朝鮮，中国。体長 2.5~2.9mm，  
ヒラタチビタマムシ *H. elegantula* によく似てい  
るが，小さく，多少膨隆し，後方の狭まりは弱く，  
前胸背側縁の前方への膨出も弱い。私は1959年に本  
種に *H. kagosimana* OBENBERGER を当てたが，こ  
れは前記の通り誤りであった。従って，本種に当る  
学名はないが，*H. atronitida* GEBHARDT, 1928 の  
ブラーグの国立博物館にあるものを模式標本と認め  
るならば，本種の学名にはこれを用いなければなら  
ないであろう。パリの国立自然科学博物館のものを  
模式標本とするならば，本種には新名を与えなけれ  
ばならないであろう。加害植物は未知であるが，恐  
らくはキイチゴ類であろう。

12. *H. subbicornis* (MOTSCHULSKY, 1860), 1860  
年に MOTSCHULSKY が Japan から記載した種類で  
あるが，その正体が未だに判っていない。記載から  
すれば間違いなく *Habroloma* 属の *elegantula* や  
*kagosimana* に近いものであるが，それ以上に進む  
ことは，記載が簡単過ぎて不可能である。1893年に  
G. LEWIS は *Trachys griseofasciata* E. SAUN-  
DERS, 1873 ナミガタチビタマムシをこの *Trachys*  
*subbicornis* MOTSCHULSKY, 1860 のシノニムと  
したので，以後大きな混乱が生じてしまった。J.  
OBENBERGER は LEWIS に従ったので，JUNK の甲  
虫目録では *griseofasciata* は *subbicornis* のシノ  
ニムになっているが，日本ではナミガタチビタマム  
シの種名に *griseofasciata* を用いる場合が多く，  
三輪勇四郎博士と中条道夫博士の日本産甲虫目録で  
は両者がそれぞれ別な独立種になっている。以来，  
ナミガタチビタマムシ *T. griseofasciata* の他に  
日本にはアジアチビタマムシ *T. subbicornis* と云  
う種類がいて，その分布も多少食いちがっていると  
考えられるようになってしまった。たとえば台湾には  
前種はいないが後者はいることになっていると云  
った工合である。しかし，実際には上記の通り両者  
は同一物で，しかも後者は真の *subbicornis* ではな  
い。私はこの誤りに気づき 1959 年に *subbicornis* を  
*Habroloma* 属に移したが，上記の理由によりそれ  
以上の追究は出来ないうでしまった。*subbicornis* の  
模式標本はソ連のモスクワ博物館にある MOTSCHUL-  
SKY のコレクション中にある筈と思われるので，  
もし標本が実在するならばこの問題も解決されるで  
あろう。なお，JUNK の甲虫目録の中で OBENBER-  
GER はソーンダーズチビタマムシ *Trachys saun-  
dersi* LEWIS, 1892 を *Habroloma* 属にしている  
が，これは誤りである。 (国立科学博物館)

○屋久島新記録のカミキリムシ

下記のカミキリムシの屋久島における記録を筆者  
は知らないで，未記録種かと思ひ報告しておく。

1. *Asaperda rufipes* BATES キクスイモドキカ  
ミキリ

1頭，屋久島上屋久町宮之浦，8. vi. 1974，入江  
平吉採集。

なお，ほぼ同処で同属の *A. bicostata* HAYASHI  
キンケチャイロカミキリも得ており，両種は混生し  
ている。

2. *Niphona furcata* (BATES) ハイイロヤハズ  
カミキリ

2頭，屋久島上屋久町宮之浦，8—9. vi. 1974，入  
江平吉採集。

3. *Rhopaloscelis unifasciatus* BLESSIG ヒトオ  
ビアラゲカミキリ

13頭，屋久島上屋久町宮之浦，11. v. 1972，入江  
平吉採集。

同処で，1972年5月と1974年6月に上記以外の個  
体も得ている。

4. *Graphidessa venata* BATES クモノスモンサ  
ビカミキリ

2頭，屋久島上屋久町白谷，6—7. v. 1972，入  
江平吉採集。

5. *Acanthocinus griseus* (FABRICIUS) ヒゲナ  
ガモモトカミキリ

1頭，屋久島上屋久町宮之浦，9. vi. 1974，入江  
平吉採集；1頭，屋久島上屋久町志戸子，17. vi.  
1974，入江平吉採集。

6. *Leiopus guttatus* BATES ナカバヤシモモブ  
トカミキリ

1頭，屋久島上屋久町宮之浦，8. vi. 1974，入江  
平吉採集。 (福岡県宇美町，入江平吉)

スジクワガタの学名

MOTSCHULSKY のクワガタムシの標本を調べ  
たことは次頁に報告したが，その結果スジクワ  
ガタには *Macrodorcas striatipennis* が該当  
することを述べた。しかし，この名と同年に発表  
された名に *Dorcus niponensis* VOLLENHOVEN  
があり，同様にスジクワガタに当るものとされ  
ている。そこで Leiden の Rijksmuseum の  
Dr. KRIKKEN にお願ひして原記載のコピーを  
入手してみたところ，産地は Japan とあるだ  
けだが，その記載と図はまぎれもなくクワガ  
タ *M. rectus* MOTSCHULSKY の♂であった。  
したがって，スジクワガタにはやはり *M. stri-  
atipennis* MOTSCHULSKY を用いるべきである。  
終りに Dr. KRIKKEN の御好意に感謝したい。

(国立科学博物館，中根 猛彦)

## V. de MOTSCHULSKY の記載・記録した日本のクワガタムシ

中 根 猛 彦

私は1971年秋に海外出張で欧米を廻り、最後にモスコウ大学の動物学博物館を訪ねた。ここは有名な MOTSCHULSKY の collection があるので、私は専ら日本産の標本を調べたがその中のクワガタムシの標本についてここに紹介しておきたい。この結果は既に報告したのだが(国立科学博物館研究報告15巻3号, 1972; 昆虫と自然7巻12号, 1972), 多少記載とも関連して述べることにする。

はじめにモスコウでお世話になった Mrs. KELEJ-NIKOWA 女史, Dr. NIKITSKY, Dr. DUBROVINA らの方々に感謝したい。

MOTSCHULSKY が日本から記録したクワガタムシは 1857 年 (Etudes Entomologiques, 6) の *Lucanus inclinatus* (♂, p. 29), *Psalidostomus* (?) *rectus* (♂, p. 29~30), 1860 年 (Et. Ent., 9) の *Dorcus binevris* (♀, p. 16), *Lucanus cantori*, *L. inclinatus*, *Psalidostomus rectus* (p. 16—記録のみ), 1861 年 (Et. Ent., 10) の *Lucanus maculifemoratus* (♂♀, p. 9—10), *Serrogathus castanicolor* (♂, p. 12—13), *Psalidognathus inclinatus* (再記載, ♂, p. 13—14), *Macrodorcas rectus* (♀, p. 16), *M. rugipennis* (♂, p. 16—17), *M. striatipennis* (♂♀, p. 17), *M. cribellatus* (♂, p. 17—18), *Dorcus binevris* (♂, p. 18—19), それらをまとめた 1866 年 (Bull. Soc. Nat. Mosc., 39(1): p. 172) のリストにある *Lucanus maculifemoratus*, *L. cantori*, *Prismognathus dauricus*, *Serrogathus castanicolor*, *Psalidoremus inclinatus*, *Macrodorcas rectus*, *M. rugipennis*, *M. striatipennis*, *M. cribellatus*, *Dorcus binevris* (いずれも記載なし) が全部であると思われる。

ところで私が見ることのできた MOTSCHULSKY の標本は次の通りで, Japonia と書いた黄色の小ラベル(時には書いてないこともある)がつけてあり, 多くは別に種名ラベルがついている。

*Lucanus maculifemoratus*, ♂: 中ぐらいのミヤマクワガタで大腮基部の歯は大きい中央歯よりわずかに長い。腿節の黄紋はきわめて長く明らかで

ある。Type と思われる。♀は見つからなかった。

*Lucanus cantori* HOPE, ♂: 小型のミヤマクワガタで, *cantori* として記録されたものであろう。

*Psalidoremus inclinatus*, ♂: 明らかにノコギリクワガタであるが, 頭と前胸がなくなっていた。Type と思われる。

*Macrodorcas rectus*, ♂: 間違いなくコクワガタのかなり発達した♂である。これが Type であろう。

*Macrodorcas rectus*, ♀: Type ラベルがあって上の標本ならべてあったが種名ラベルはついていない。*rectus* ♀として記載されたものと思われるが, 標本はアカアシクワガタ *rubrofemoratus* であった。記載から見ても間違いないと考えられる。

*Dorcus binevris*, ♀: 頭には 1 対の小瘤があり, 頭楯は強く横長で台形, 各上翅は会合部が滑らかで疎らに微細点刻があり, 背部の 2 対の点刻列は後方で不明瞭となり対の点刻列の間は細かく点刻されるが, 他はごく密接して点刻される。これらの特徴は記載とも一致し, 明らかにコクワガタである。MOTSCHULSKY は *binevris* の♂も記載しているが, その標本は見当らなかった。

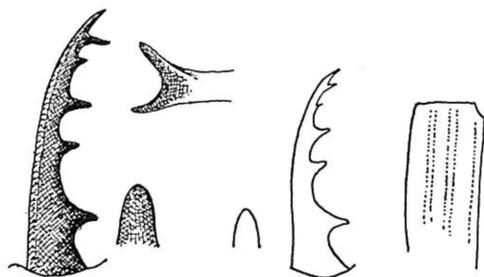
*Macrodorcas rugipennis*, ♂: これはやや小型のコクワガタであった。Type と見てよいだろう。

*Macrodorcas striatipennis*, ♂: 中ぐらいのシジクワガタで, 上翅の点刻列は強くない。

*Macrodorcas cribellatus*, ♂: 小型のシジクワガタである。上記の二つとも Type と思われる。

*Serrogathus castanicolor*, ♂の標本は見出さなかった。また *Prismognathus dauricus* は調べなかったが, 日本産のはなかったようである。1861 年の報告には *Prismognathus* 属の記載があるが, 日本産としての記事は見当らない。なおリストの中で *binevris* だけが *Dorcus* になっているのは少々解せないが, 彼の属の検索によると *Dorcus* は雄の大腮が頭より短いとあるから, *binevris* の♂としたものは小型のコクワガタかと思われる。

(国立科学博物館)

左: *Lucanus maculifemoratus*

♂ 左大腮(先端の側面とも)と頭楯

中: *Lucanus 'cantori'*

♀ 左大腮と頭楯

右: *Dorcus binevris* ♀

左上翅(会合部は滑らか, 各の対になった点刻列がある。対の点刻列の列間は細点列を, 他の大部はごく密に点刻列がある。対の点刻列は後方不明となる)

(モスコウでフリーハンドでスケッチしたものから描く)

## 日本初記録のアオゴミムシ

清水 昭平 楠井 善久

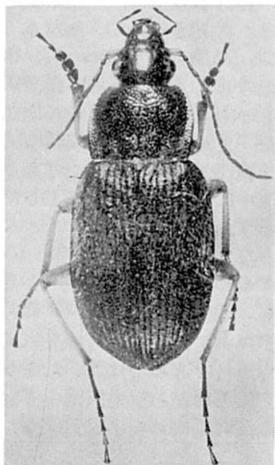
筆者らが北海道内で採集した歩行虫の中に日本未記録と思われるアオゴミムシの1種を見出したので報告する。

*Chlaenius* (*Chlaeniellus*?) *stschukini* MÈNÉTRIÈS エゾアオゴミムシ (新称) 3♂♂, 北海道網走郡女満別, 15. vi. 1974, 清水昭平採集; 1♂, 北海道天塩郡豊富町兜沼, 14. vii, 1974, 楠井善久採集。

体長12mm 内外, 頭部と前胸背は赤銅色の光沢がある。上翅はこげ茶色で薄い銅色または薄い緑色を帯び, 全体に金色の微毛を密布する。腿節, 脛節は赤色を帯び, 跗節は黒色。触角第1節は赤色, 第2~11節は黒色, 第1~3節は数本の剛毛を散布し, 第4節の先端ろおよびそれ以降の節は微毛を密布する。前胸背は正中線付近を除いて金色の微毛があり, 明瞭な点刻が認められる。その側縁は後角近くでも湾入しない。上翅は後半で軽く膨出し, 条溝は明瞭に点刻される。

本種は従来, シベリア東部とモンゴル北部のみから知られていたが, 国立科学博物館には満洲北部産の標本が数頭ある。北海道に本種が産することは以前から一部の人には知られていた。文献のみではどの種に当るのか詳でなかったが, 一昨年上野俊一博士はソ連のレニングラードを訪れた折に, KRYZHANOVSKIJ 博士に会って, 本種が上記の種に当たることを確かめてこられた。北海道では今のところ個体数はとても少ないようであるが, シベリア東部では北海道とは異なり, アオゴミムシよりも個体数はるかに多い普通種であるという。清水は3♂♂共に女満別の湿地の草間で発見した。同所では他にキベリアアオゴミムシ, アナバネゴミムシなどが共に見出された。国立科学博物館所蔵の北満洲産の標本と比較して見たが, 日本産を大陸産から区別し得るだけの特徴を見出せなかった。北海道内では上記の2産地以外に石狩川流域や帯広地方にも生息することが確かめられている。

なお, 本種は外見上アオゴミムシ *C. (Chinelaus) pallipes* GEBLER によく似ていて次の点で区別されるが, 須賀邦耀氏によれば後述のように別亜属に属するものである。



1. 触角は第1節のみ赤褐色, 第2~11節は黒色, 第1~3節は数本の剛毛があるのみ, 第4~11節は密に剛毛がある (アオゴミムシでは第11節まで全部赤褐色, 第2節よりかなりの剛毛を有し, とくに第3節より以後は密である); 2. 前胸背は後角でもほとんど湾入することなく, 側縁は後角近くで広く上反する。点刻は粗大 (アオゴミムシでは後角で明らかに湾入し, 側縁は一律で平滑, 点刻は小さく密)
3. 脚の跗節は常に黒色または黒に近い黒褐色 (アオゴミムシではすべて赤褐色); 4. 小腿枝は先端部を除いて黒色 (アオゴミムシではすべて赤褐色), などの点で異なる。

亜属については, 須賀邦耀氏によれば材料が不足して決定できない。JEANNELの検討したものもあるが, ここでは一応米国の T. BELL (1960) に従って上記の通り *Chlaeniellus* 亜属に属せしめた。須賀氏は *Agostenus* 亜属と *Chlaeniellus* 亜属の中間的な形質を具えていることに着目している。なお和名のエゾアオゴミムシはアオゴミムシに形態が似ていることと, 本邦では北海道特産である点を考慮して付けたものである。

本稿を草するに当り, 須賀邦耀氏を通じて種々御教示を仰いだ上野俊一博士, 色々御指導を賜った田中和夫博士および須賀邦耀氏, 写真撮影を快諾された鈴木 互氏に深謝する。標本は清水の手許と田中和夫博士および須賀邦耀氏の許に保管されている。

(清水: 東京都杉並区, 楠井: 東京空港検疫所)

## ○クリイロヒゲハナノミ東京の採集例

クリイロヒゲハナノミ *Higehananomia palpalis* Kōno は本州, 四国, 九州, 伊豆御蔵島, 屋久島, 奄美大島, 徳之島, 沖繩本島, 石垣島, 西表島, 与那国島, 台湾から報告のある特異な大形のハナノミであり, 本州においては最初愛知県蒲郡から報告され, その後東京上野, 市川, 岡崎などからも発見されている。筆者は東京杉並区産の本種を検することができたのでここに都区内の追加採集例として報告したい。

1♀, 杉並区和泉町, 13. viii. 1969, 木附嘉理採集。この個体もまた燈火に飛来したものであり, 上記の場所で他にも目撃したことがあるという。本種は明らかに暖地性のもので, 筆者が徳之島で経験したことによると, 幼虫はシイの枯材中に穿孔し, しかも個体数が多かったことを併せ考えれば, あるいは東京などで採集された個体はより南の方面からの移入材より脱出したものかもしれない。筆者の知る限りでは, 現在のところ確実に生息していると思われる北限は四国象頭山である。

末筆ながら上記標本を恵与された木附嘉理氏に厚く感謝申しあげる。(横浜市金沢区, 高桑正敏)

## ○北海道から新記録のハネカクシ (ハネカクシ類分布資料 4)

昨年、井本暢正本会々員を通じ、函館在住の安田幸夫氏から、同氏が北海道南部(主として渡島半島)で採集された若干のハネカクシ類の御恵与を受けた。それらの中には下記の如く北海道未記録種が含まれていたのここ記録し、上記両氏の御厚意に報いたい。

1. *Lobrathium partitum* (SHARP) サキアカバナガハネカクシ  
1頭, 蛾眉野, 函館, 16. viii. 1961.
2. *Megalinus japonicus* (SHARP) オオキバナネガハネカクシ  
1頭, 雁皮山, 渡島, 1. viii. 1953.
3. *Philonthus (Bisnius) wuesthoffi* BERNH.  
2頭, 雁皮山, 渡島, 17. v. 1961; 1頭, メナトイ川, 渡島, 20. v. 1962.
4. *Philonthus (Philonthus) rectangulus* SHARP  
カクコガシラハネカクシ  
1頭, 川汲峠, 渡島, 25. vi. 1961.
5. *Philonthus (Philonthus) spinipes* SHARP  
オオアカバコガシラハネカクシ  
1頭, 旭岡, 函館, 29. iv. 1962.
6. *Lordithon principalis* (SHARP) ハラオビキノコハネカクシ  
1頭, 川汲峠, 渡島, 28. v. 1961.
7. *Bolitobius setiger* (SHARP)  
1頭, 鱒川, 函館, 14. v. 1961.

(東京農大, 渡辺泰明)

## ○沖縄本島未記録のヒゲナガゾウムシ 2種

沖縄本島未記録と思われる種が2種類, 筆者の手元にあるので報告しておく。

1. *Acorynus anchis* JORDAN  
1頭, 伊豆味, 24. vi. 1970, 三宅純男採集; 1頭, 与那覇岳, 6. iv. 1973, 筆者採集。  
本種は, 奄美大島, 屋久島, 鹿児島で記録されており, 奄美大島や屋久島では数多く採集されているが, 沖縄での採集記録はないので報告する。沖縄産の本種は, 上翅斑紋が少し異なり別種の様感がする。
2. *Phaulimia incertus* SHIBATA  
1頭, 与那覇岳, 6. iv. 1973, 筆者採集。  
本種は奄美大島で採集された1♀によって, 1963年に記載されたもので, その後採集された話は聞かない。(和歌山県楠本中学校, 的場 績)

## ○上甌島から未記録の甲虫類(I)

上甌島は鹿児島県串木野港から南西方向へ25kmへたった島で, 野村健一(1936), 坂元久米雄, 島洪(1965), 小宮義璋(1968), 田中洋海(1973), 田中洋(1974)によって, 現在まで60種の甲虫類が報告され, コメツキムシ科については僅かにサビキコリ *Agrypus binodulus* MOTSCHULSKY のみが記録されているに過ぎない。筆者は1975年4月28日から30日まで同島に於て昆虫類を採集する機会を得, 若干の未

記録種を採集することが出来たので, 今回はコメツキムシ科についてのみ報告する。

1. *Eanoides puerilis* (CANDÈZE) シリプトヒラタコメツキ  
1頭, 里~市の浦, 30. iv. 1975.
2. *Dolerosomus gracilis* (CANDÈZE) キバナホソコメツキ  
2頭, 里~市の浦, 30. iv. 1975.
3. *Melanotus (Melanotus) annosus* CANDÈZE  
クロツヤクシコメツキ  
1頭, 里, 28. iv. 1975; 9頭, 里, 29. iv. 1975;  
3頭, 里~市の浦, 30. iv. 1975.
4. *Melanotus (Melanotus) sprenendus* (CANDÈZE) ナガチャクシコメツキ  
2頭, 里~市の浦, 30. iv. 1975.
5. *Paracardiophorus sequens* (CANDÈZE)  
1頭, 里~市の浦, 30. iv. 1975。  
尚, 文末ではあるが同定を御願ひした東京農大昆虫学研究室鈴木互氏に厚く御礼申し上げる。  
(東京農大, 吉田喜美明)

## ○福島県会津地方のオオヒメゲンゴロウ

福島県会津若松市院内から背炙山(せあぶり)に登る登山路が羽黒山を越えたあたり, 標高約600mのあたりに, うす暗い林の中に, 路の左側からしみ出す水が溜って出来た段状になったいくつかの水溜りがあった。その中に沈んだ落葉などの間に6月頃に行くといつでも数頭のオオヒメゲンゴロウ *Rhantus erraticus* SHARP を見出すことが出来た。また, 会津若松市青木山(地図には奴田山となっている)の右肩の標高約500mの所にある沼でも1948年6月23日に1頭を得ている。恐らく会津若松市周辺の山地では稀な種ではないと思うが, 上記両地共に私が同地に居た1947~1951年頃の語で現在どんな状態になっているか私は知らない。本種は北海道では少なくないが, 本州からの記録は少ないので記録しておく。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

## ○漂着木より採集されたサツマウバタムシ

1971年6月3日, 沖縄県石垣島石垣市街地近くの海岸に打上げられていた材木よりサツマウバタムシ *Chalcophora yunnana* FAIRMAIRE を採集したので報告しておく。同材の表面には多数の脱出孔があき, その中には多数の成虫が頭部だけを見せて死んでいた。また, 採集した個体は羽化後間もなくのもので, 翅鞘などがまだ軟らかであったことから, 材が漂流中に羽化脱出しようとした個体が死んだものと推察される。

なお, この個体は沖縄, 八重山両群島亜種 *ssp. abnormalis* MIWA & CHUJŌ と同定されることから, この材が同島内の何処からか流れて来た可能性が高いが, この記録は黒沢良彦博士の分布論の一端を裏付けるのではないだろうか。

末筆ながら亜種同定の労をとられた東京農大の秋山黄洋氏にお礼申し上げる。

(東京農大, 岡島秀治)

## ○岐阜県のヤスマツケシタマムシ

特異な形態を持つこのタマムシは、最近新潟県から記録されたが(甲虫ニュース No. 1), 主として近畿以西の本州と九州に分布している。筆者は1959年に岐阜県下で採集しているが、その後記録もなく、最近(1974)刊行された「岐阜県の動物」にも見当たらない。古い記録で恐縮であるが報告しておく。

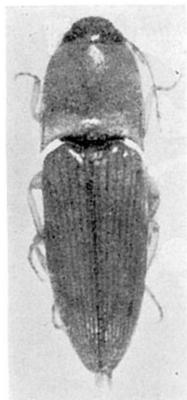
1頭, 岐阜県郡上郡大和村内ヶ谷, 21. vi. 1959, 筆者採集・所蔵。(愛知県小牧市, 穂積俊文)

## ○コメツキムシの分布2題

1. *Heteroderes inexpectatus* KISHII

1♂, 千葉県富津町, 9. xi. 1975, 立川周二採集。(写真参照)

本種は1962年に茨城県阿見町から採集された1♂に基づいて岸井氏が1969年に記載したもので、その後同場所から採集された個体を正木氏が本誌 Nos. 27, 28 に記録しているに過ぎない。しかしながら筆者の手許には立川周二氏から恵与を受けた上記の個体があるので報告しておく。この個体は、埋め立て地に自生している植物の根元から発見されたものである。

2. *Harminathous nakanei*

KISHII フトツヤハダコメツキ

1頭, 御蔵島川田, 17. vii. 1974, 鈴木 亘採集。

本種は本州, 四国, 九州などに分布することが知られているが、伊豆諸島からの記録はない。筆者は上記の如く伊豆御蔵島で本種を採集しているので記録しておく。

なお日頃有益な助言を賜っている大平仁夫博士並びに標本を提供された立川周二氏に深く感謝する。

(東京農大, 鈴木 亘)

## ○コゲチャフタモンヒゲナガカミキリの生態的知見

*Monochamus asiaticus* (HAYASHI, 1962) コゲチャフタモンヒゲナガカミキリは、本邦産 *Monochamus* 属では唯一の *Opepharus* 亜属の種で、ずんぐりした体に長い触角を有する。本種の産地は、八重山諸島の西表島と石垣島が知られているが、個体数はあまり多くない。筆者はこれまで何度か八重山諸島で調査採集する機会があったので、その際知り得た本種の生態について報告しておく。

筆者が本種を採集した場所はすべて石垣島於茂登岳であり、約30頭を得ている。原産地は西表島でありながら、筆者は全く得ていない。於茂登岳での採集体験から考えると西表島でも筆者が調査した地域よりも更により高地帯に生息しているからと思われる。しかし、個体数が少ないので、生息域で調査していても採集し得なかったことも考えられる。於茂登岳では、中腹附近から得ており、特に尾根筋で多く得ている。

成虫は、5月中旬頃から発生し、殆どはその年の秋の終り頃には死亡してしまうものと思われるが、1973年4月1日に成虫野外越冬したと明らかに認められる。上翅の斑紋等体の微毛が褪色し、擦れて黒い地肌が裸出した部分の多い1♀を得ている。この事から、わずかの個体は越冬するのが判るが、遅れて発生したためなのかは明らかでない。

成虫の発生する頃、於茂登岳の尾根筋のコンロンカの蔓を食い切る何者かがいる。何者の仕業なのかは知らないが尾根筋のしかもコンロンカだけに限られているのは興味深い。食い切られたコンロンカはやがて枯れて葉が巻いてくる。本種の成虫は、この巻いた枯葉の中に潜り込んでおり、よく観察すると葉の外に長い触角が出ている。頭かくして尻かくさずであるが、なかには本人いや本虫は隠れているつもりだろうが、葉の外側に静止している大胆不敵? な個体も観察した。その他、アカメガシワ、オキナワハクサンボク等の枯れると葉が巻くものでも得た。恐らく、枯葉の巻く性質の木だったらそんなに選ばないものと思うが、なかなかこの様な状態の枯葉の付着した伐採枝や枯枝には遭遇しない。この様な生態は *Monochamus* 属としては特異で、*Acalolepta* 属(ピロウドカミキリ類)やアナバネヒゲナガカミキリ等の枯葉色をしたカミキリムシによくみられる。

また、イスノキの生木をたたき網してかなりの個体を得ているし、その細い枝の樹皮を後食しているのを観察した。そのイスノキであるが丈の高い木の上部では得ておらず、すべて顛倒したものや下枝で得ており、3mを超える位置では得ていない。

本種は夜間活動性の種だろうが、毒蛇が怖いので、夜間の観察はしていない。

幼虫の加害材としては、エゴノキの枯木の蛹室にいる成虫を同宿の同好者が得ていた。

(福岡県宇美町, 入江平吉)

## ○ムモンオオハナノミ伊豆御蔵島に産す

ムモンオオハナノミ *Macrosiagon nasutum* THUNBERG は野村 鎮氏(1963, 原色日本昆虫大図鑑 II, 北隆館)によれば、日本では本州と四国, 海外では台湾から広くボルネオ, スマトラ方面にかけてその分布が知られる。今回、伊豆諸島御蔵島から本種が採集されたのでここに報告しておきたい。

1♀, 御蔵島, 9—12. vii. 1974, 衣笠恵士採集。

本種は日本では採集例が少ないもので、伊豆諸島からもこれが初記録と思われる。また本種が属するオオハナノミ科は、沢田玄正・渡辺泰明両氏(1969, 御蔵島の昆虫相, 農学集報14(1))および渡辺泰明・相馬州彦両氏(1972, 三宅島の昆虫相, 農学集報17(1))の記録にも見られないことと各種図鑑類の分布地に伊豆諸島が挙げられていないことにより、伊豆諸島からは初めて記録されるものと思われる。

上記標本は筆者が保管している。貴重な標本を快く恵与下さった衣笠恵士博士に厚く御礼申しあげる。

(横浜市金沢区, 高桑正敏)

## ○ツシマムツボシタマムシの学名と分布

ツシマムツボシタマムシ *Chrysobothris tsushimae* OBENBERGER, 1936 は対馬から記載された種類であるが、1943年に J. OBENBERGER は A. THÉRY が満洲のハルビンから記載した *C. trassaerti* THÉRY, 1939 を本種のシノニムであると指摘した。一方、OBENBERGER は樺太からサムライムツボシタマムシ *C. samurai* OBENBERGER, 1935 を記載しているが、チェコスロバキアのプラークの国立博物館にある両者のタイプ標本を見てみると、意外にも、サムライムツボシタマムシはツシマムツボシタマムシの中に時々現れる翅鞘の 6 個の陥凹紋のうち最後方の 2 紋が完全に消失してしまう 4 紋型に当ることがはっきりした。従って、今後は、ツシマムツボシタマムシの種名には 1 年先に記載された *samurai* OBENBERGER, 1935 を用いなければならない。またこの 4 紋型は 6 紋型との間に中間型がない。遺伝的な型であると考えられるので、4 紋型を form *samurai* OBENBERGER, 6 紋型を form *tsushimae* OBENBERGER として区別してもよいであろう。私が北朝鮮の赴戦高原から記載した *C. laevicollis* Y. KUROSAWA, 1948 もやはり本種の個体変異の中に含まれるものと考えられるので、これらのことを私は国立科学博物館研究報告, A, 第 1 巻 1 号(1975)の中で報告しておいた。

本種の分布は樺太、満洲、朝鮮、日本となるが、アムール地方か沿海州にも必ず産するであろう。日本国内では、対馬だけであったが、最近になって、広島県冠山(小阪敏和, 1970)、大分県飯田高原(入江平吉, 1975)と相次いで報告され、本州や九州にも産することが確実になった。中国地方ではその後私はさらに次の産地の標本を確認することが出来た。どうやら中国地方から北九州にかけて本種は広く分布するものらしい。

288, 岡山県総社市高間, 25. v. 1975, 青野孝昭採集; 1 ♀, 岡山県新見市草間, 12. vii. 1975, 青野孝昭採集。

以上の 3 頭全部が 4 紋型である。広島県冠山でもそうであるが、中国地方では 4 紋型の出現する頻度が高いのは注目してよいであろう。

上記の通り、本種は対馬から北九州、中国地方へかけて西南日本の真日本寄りに分布することがはっきりしたが、岡山県と樺太の間の地方に産しないと云えない。今後の調査が必要であろう。最後に、岡山県の標本を検査する機会を与えて頂き、その発表を快諾された青野孝昭氏に深謝する。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

## ○ツシマムツボシタマムシ岡山に産す

ツシマムツボシタマムシ *Chrysobothris samurai* OBENBERGER, 1935 は国外では樺太に、日本領土内では広島県冠山、大分県飯田高原、対馬等に産するが、最近筆者は山地 治, 守屋健次両氏の御好意により、岡山県産の本種を恵与されたので発表したい。

1 ♂ 1 ♀, 岡山県高梁市広瀬, 10. v. 1975, 山地治採集。(♂は六紋型, ♀は四紋型)

なお、従来、ツシマムツボシタマムシの学名には *Chrysobothris tsushimae* OBENBERGER, 1936 が用いられていたが、黒沢博士がヨーロッパで両種の模式標本を検査された結果、*tsushimae* は *samurai* と同一種にすぎない事が判明した。(Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo, Vol. 1, No. 1, pp. 73-74, 1975) 御助言をいただいた黒沢博士に深謝する。

(横浜市磯子区, 秋山黄洋)

## ○クチキマグソコガネを人糞より採集

従来、朽木あるいは土中より採集され、非食糞性とされているクチキマグソコガネ *Aphodius hibernalis* (NAKANE et TSUKAMOTO) を、人糞中より採集したので報告する。



1 頭, 山梨県大菩薩嶺沼の窪付近, 8. vi. 1975, 筆者採集・保管。

本種が、人糞下の土中より採集された例(月刊むし, 55号, 1975)はあるが、人糞中より採集されたのは初めてと思われる。

採集したのは陽当りの良い小高い丘の上にあった 1 日程経過したと思われる人糞中で、偶然飛来していたというような状態ではなかった。

尚、同定は筆者が「原色昆虫大図鑑Ⅱ」(北隆館)、および「益本仁雄, 1967: 日本産コガネムシ類解説[食糞群]vii, 昆虫と自然, Vol. 2, No. 7, 8」を基に行ない、①体長約 8 mm. 体は黒褐色で光沢がある ②頭部前縁は弧状に湾入し、その両端に歯状突起がある ③前胸背は横長で後方に向い狭くなり、後角付近は斜めに切断され、少し湾入し、フチドリは中央に達する ④上翅肩部にトゲを持つなどの特徴を具備していたためクチキマグソコガネと判断した。

末尾ながら、標本を撮影して下さった古川均悟氏およびお忙しいなか親切なご助言を下された益本仁雄氏にお礼申し上げる。

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

## ○丹沢でホソヒメクロオサムシを採集

ホソヒメクロオサムシ *Carabus harmandi* LAPOGE は、東京近郊では大菩薩嶺、三頭山、三ッ峠、富士山などで採集されているが、筆者は神奈川県丹沢で採集したので報告する。

2 ♀ ♀, 神奈川県足柄上郡山北町検洞丸, 12. ix. 1975, 筆者採集。

検洞丸の海拔約 1,200m のあたりでトラップで採集した。(横浜市南区, 蕭 嘉広)

## ○カンアオイの種子を運ぶハネカクシ

1975年6月26日、奈良県橿原市鳥屋のコナラ林で、クロクサアリの行列中にヒメカンアオイの種子を置き、アリの種子にたいする反応をしらべていた。14時45分に20個の種子をおき15時49分に見廻ったところ、1頭の小形のハネカクシが種子の脂肪様付属体(カルンクル)を大腿でくわえ、上半身を斜上させる姿勢で運んでいるのがみられた。

このハネカクシは渡辺泰明氏の手をわずらわせて沢田高平氏に同定していただいたところ、ヒゲブトハネカクシ亜科の *Zyras (Pella) comes* (SHARP, 1874) とのことであった。沢田氏の御教示では、この類の植物種子の運搬習性を報じた記録を見出せなかった、ということである。種子に付属体をそなえ、アリ型散布をする植物は湿潤な温帯林の林床に多いということであるから、注意すればハネカクシのこのような例もまた案外多いのかもしれない。

同定の労をとられた沢田・渡辺両氏にお礼申上げる次第である。

(大阪市立自然史博物館、日浦 勇)

## ○宮城県の甲虫3種

県内各地で蛾を採る目的で灯火採集を実施して来たが、その折に飛来した甲虫3種を記録しておきたい。

1. ムラサキスジアオゴミムシ *Eobrosicus richteri* KRYZHANOVSKIY 2♂♂1♀、蔵王山かもしか温泉、3. ix. 1967、筆者採集。

2. オオモモブトシテムシ *Necrodes asiaticus* PORTEVIN 1♂、蔵王町遠刈田温泉、25. vii. 1967、筆者採集；2♂♂、蔵王山かもしか温泉、23. vi. 1974、筆者採集；1♂、栗原郡花山村温泉、28. ix. 1968、筆者採集。

奥羽山脈側の山地では稀な種類ではなく、よく灯火に飛来する。

3. ムネスジダングラコメツキ *Harminius singularis* LEWIS 1頭、栗原郡花山村温泉、30. viii. 1968、筆者採集。

多くのオオツヤハダコメツキ *Stenagostus umbratilis* LEWIS に混じて1頭だけ飛来した。

(仙台市、渡辺 徳)

## ○アカアリヅカエンマムシの採集記録

アカアリヅカエンマムシ *Hetaerius gratus* LEWIS は1884年に記載されて以来記録に乏しく、わずかに1944年に長谷川仁、久保田政雄両氏が、井上寛氏が横浜で1942年6月27日にサムライアリに襲われたクロヤマアリの巣から這い出して来た1頭を採集されたことを記録図示されただけである(関西昆虫学会々報、14, p. 84)。そこで、かなり古い記録で恐縮ではあるが、福島県会津若松市で私が本種を採集した時のことを記録しておく。

会津若松市の青木山(奴田山)山麓の一部、青木部落と御山部落の中間に、山が崩壊して安山岩質の岩塊が広く地表に累積した所がある。ここは落葉樹の疎林になっていて、春先はよく陽が当り、地表に

ある石下には多くのクロヤマアリとトビイロケアリが営巣している。その蟻の巣をあばいていくと、クロヤマアリの巣中に限って本種が時折り、右往左往する蟻たちに混ってヨチヨチ歩きをしているのを発見することが出来、時には1つの巣中に2頭もいることもあった。同じ場所にトビイロケアリの巣も多くあったが、この方には本種は全く発見されず、本種が発見されるのは常にクロヤマアリの巣中に限られていた。クロヤマアリの巣中には他にも数種のアリヅカエンマムシ類が見られたが、オオトゲアリヅカエンマムシ *Lasinus spinosus* SHARP と思われる種類もクロヤマアリの巣中に限られていた。逆にコマトヒゲブトアリヅカエンマムシ *Diartiger fossulatus* SHARP は常にトビイロケアリの巣中に限って発見され、クロヤマアリの巣中には見当らなかった。なお、同地で蟻の巣からこれらの甲虫が採集出来るのは、蟻が越冬から目覚め、春の陽光に温められた地表近くに上昇して来て石下などに営巣を始める頃に限られ、4月下旬から5月中旬にかけての頃が最適で、それ以降は蟻が地中に降下するにつれて採集が困難になる。他の地方でも、同様に適当な季節に同じ様にして探してみるといろいろな好蟻性の甲虫が採集されるであろう。戦前札幌におられた西島 浩博士も同地でアカアリヅカエンマムシ以上に記録のないクロアリヅカエンマムシ *Hetaerius optatus* LEWIS, 1884 のかなりの数を採集しておられたが、残念ながら採集時の状況をお聞きするのを失念してしまった。なお、原色昆虫大図鑑Ⅱ、35図版に示されたアカアリヅカエンマムシは私の採集品である。

(国立科学博物館、黒沢良彦)

## ○オオキボシハナノミのトカラ諸島の記録

オオキボシハナノミ *Hoshihananomia auromaculata* (CHÛJŌ) は3亜種に分れ、原亜種は台湾に、subsp. *amamiana* NOMURA は奄美大島に、subsp. *nipponica* NOMURA は屋久島、九州(福岡県)、対馬、四国、本州(紀伊半島・山梨県・福島県)、北海道(トムラウシ)に分布することが知られているが、トカラ諸島からはまだ報告がないのでここに記録しておきたい。

1♂、トカラ諸島中之島先割岳、10. vii. 1974、宮原道則採集。

この個体は、上翅の黄色紋が奄美大島産の大部分の個体よりも濃色なこと、小楯板は基部側縁のみわずかに黄色毛が認められることなどから subsp. *amamiana* よりも subsp. *nipponica* に含めるべきと考えられる。しかし、多数の標本を検すると、これら2亜種は互いに特徴が重なる個体が多いために、上記1♂だけではどちらの亜種名を当てるべきかの決定はできないように思うし、奄美大島産の個体をそれ以北の個体と亜種段階で分けることには少し無理があるかも知れない。

上記標本は筆者が保管している。貴重な標本を快く下さった宮原道則氏に厚く感謝したい。

(横浜市金沢区、高桑正敏)

○屋久島でネアカツツナガクチキムシを採集

南西諸島にはナガクチキムシ科の種は非常に少なく、筆者の手元にも約10種があるにすぎない。その中に、恐らく南西諸島未記録と思われる屋久島産の *Hypulus cingulatus* LEWIS ネアカツツナガクチキムシがあるので記録しておく。

1頭、屋久島高塚山、16.vi.1974、入江平吉採集。高塚山避難小屋に数日間泊り、小屋周辺から更に高地帯の宮之浦岳方面で、連日の雨の中で調査し、小杉谷へ下り途中、『縄文杉』と銘を持つ大スギより約100~200m程下った登山道脇の朽ちかけたシキミの倒木で得た。(福岡県宇美町、入江平吉)

連絡・報告

◇談話会 本年の談話会は3の倍数月(3・6・9・12)に開催する予定ですのでお含みおき願います。なお、昨年実施されました談話会の演題および演者は下記の通りです。

第1回例会 昭和50年2月23日 於：国立科学博物館(上野) 1) 志摩半島の *Ohomopterus ohkawai* について 小宮次郎(東京都) 2) 屋久島のオニクワガタについて 黒沢良彦(科博)。第2回例会 昭和50年4月13日 於：国立科学博物館(上野) 1) オーストラリアの自然と甲虫 小宮義璋(東京都) 2) ニュージーランドとタスマニアの自然と洞窟を訪れて 上野俊一(科博)。特別集会 昭和50年9月26日 於：松戸市民会館(松戸) オーストラリアの自然と昆虫 小宮義璋(東京都)。この集会は松戸市で日本昆虫学会大会が開催された折に行われ、多くの地方在住会員が参加した。第3回例会 昭和50年12月21日 於：国立科学博物館(上野) カミキリムシ類の大赬 下村 徹(東京農大)。なお、例会終了後、有志により恒例の忘年会が「鳥正」で行われたが、その折「余剰文献」のオークションが行われ、売上金の全てが本会に寄附された。

◇甲虫ニュース 本誌は発行の遅延を取り戻す意味で合併号の形をとって参りましたが、昨年までの発行分で完全に遅れを取り戻しました。従って、本年からは各号とも単号で発行されますが、ページ数は昨年同様にする予定ですので積極的な投稿をお願い致します。

なお、事務簡素化のため投稿されました会員各位にいちいち御返事は致しませんが、受理した原稿は

出来る限り登載致す予定ですので御承願います。

◇会計報告 昭和50年度の収支決算が下記の通り世話人会で了承されましたので御報告致します。なお、昭和51年度からは特別出版物発行等にかかわる会計は別勘定として一般会計から分離させました。一般会計収支決算報告(昭和50年12月31日現在)

収入の部		支出の部	
前年度繰越	204,719	甲虫ニュース印刷費(25/26~31/32号)	339,055
会費収入	240,500	通信・郵送費	34,605
バックナンバー売上(含送料)	54,085	事務用品費	1,190
広告費	40,000	特別集會費	5,000
預金利息	6,191	特別出版物会計へ振替	250,000
寄附金	248,100	次年度繰越	163,745
合計	793,595	合計	793,595

特別出版物会計収支決算報告  
(昭和50年12月31日現在)

収入の部		支出の部	
一般会計から繰入	250,000	次年度繰越	250,000
合計	250,000	合計	250,000

◇採集会の予告 本年度は下記の如く採集会を企画致しましたので御知らせ致します。

期日：7月23日~25日

場所：宮城県蔵王かもしか温泉附近(会員のみ期間中の宿泊費は無料)。

なお、詳細は6月の例会の折に説明致しますが、例会に出席出来ない会員は談話会宛に問い合せて下さい。(世話人一同)

甲虫談話会

会費(1カ年)1000円、次号は6月中旬発行予定、投稿切は5月10日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園  
国立科学博物館動物研究部内  
電話(364)2311、振替東京60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥4,500、桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400、送料一箱につき都内及第一地帯：3箇以下¥1,200、4個以上¥850(以下同様)、第2地帯¥1,400、¥950、第3地帯¥1,600、¥1,050。其他、各種器具、針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25  
電話 (03) 811-4547

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号 100本 160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社